あなたを一人にはしない　　ヨハネ 14:16～20

今日は「母の日」ですね。日本はもちろん世界中で母の日が祝われています。テレビで「母の日のプレゼントもう決めましたか？」なんて言っていましたが余計なお世話ですねよね。母の日はもちろん、教会でも祝います。というよりご存知の方が多いと思いますが母の日は最初、教会で始まったのです。100 年ほど前にフィラデルフィアというアメリカの町にアンナ・ジャービスさんという女の子がいたのですが彼女のお母さんが亡くなってしまいました。アンナさんは自分のことを愛してくれたお母さんが亡くなったことを深く悲しみ、こんなに自分を愛してくれたお母さんに感謝も恩返しも出来ないことをとても辛く思い、お母さんへの感謝のしるしとして白いカーネーションを飾るようになったのが始まりです。人との別れは悲しいことです。その人との関係が無くなるわけですから孤独感が襲います。世の中に大勢の人がいるといっても私たちは限られた人とのつながりの中で生きているわけですのでそれが無くなった時に大きなショックを受けます。特にその関係が親しく、良いものであればあるほど辛いですね。

今日の箇所はこれから主イエス・キリストが十字架におかかりになる前日に語られた告別説教と言われるものです。イエス・キリストが十字架に架けられ、死なれる事によって生じるしばらくの悲しみ、寂しさ、無力感、弱さは、やがて来て下さる聖霊によって与えられるいつまでも変わらない喜びによって補われて余りある、というのがこの告別説教の中心のメッセージです。主イエス・キリストは「わたしはあなたがたを捨てて孤児とはしません」とはっきりと言われました。その中で弟子たちを独りぼっちにしないために身に余るような神様の平安がここにあります。どんな風に一人ぼっちにされないのでしょうか？　聖書から見てゆきましょう。

これから主イエスとの関係は死をもって終わってしまうかもしれないという不安の中にある弟子たちに主は、「あなたがたは心を騒がしてはなりません。」とその不安を鎮め、「わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言っておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。」と、もう一度戻ってくるという約束をさえました（１４：１～３）。そして主の再来と共に約束されたのが、「もう一人の助け主」である聖霊が与えられるということです。この１６～２０節において、聖霊について２つのことが紹介されています。

聖霊は助け主（１６節）と言われますが元のことばではパラクレートスと言います。パラとは、「すぐそばに」という前置詞です。クレートスとは「呼ばれたもの」という意味です。この二つが合成されると、「すぐ側に立って、弁護をし、慰め、執り成し、助けるために呼ばれたもの」という意味となります。いつもそばにいてくださって、困っている時は助け、糾弾されている時は糾弾する者に対して弁護し、落ち込んでいる時は慰め、迷っている時は助言を与えるという助け人となるというのです。

次に聖霊は真理の御霊、ということばで紹介されます。普通ギリシャ語では御霊プニュウマは中性名詞です。つまり物などに用いられますがそれを受け継ぐ代名詞は男性形になっています。つまり、ここで主イエスは、御霊とはエネルギーとか火とか水のような非人格的な霊を指しておられるのではなく、人格を持つ方としての聖霊を指しておられるということなのです。

次に主イエスは「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。」（１６節）と語られました。主イエスがみ父に願い、み父が与えて下さるお方が聖霊です。ただ、この「願う」ということばは、下の者から上の者に「懇願する」ということばではなく、友達関係を示す言葉です。これらのことから、み父、御子、御霊は同列の関係にあるのです。

聖霊については「イエスが父のもとから遣わす」方（１５：２６）とも紹介されています。言い方を変えると、聖霊は、「イエスの霊」でもあるのです。この表現は新約聖書にしばしば見られます。例えば使徒の働きの中でルカが「こうしてムシヤに面した所に来たとき、ビテニヤのほうに行こうとしたが、イエスの御霊がそれをお許しにならなかった。」（使徒１６：７）と記したところがあります。また、パウロも「神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉の中にではなく、御霊の中にいるのです。キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません。」（ローマ８：９）と言っています。更にペテロも、「彼らは、自分たちのうちにおられるキリストの御霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光を前もってあかしされたとき・・・」（1 ペテロ１：１１）と言っています。つまり、聖霊は主イエスと別な方ではなく、み父も含めて一体として働かれる方なのです。それが２０節で語られます。「その日には、わたしが父におり、あなたがたがわたしにおり、わたしがあなたがたにおることが、あなたがたにわかります。」父なる神、子なるキリスト、聖霊の交わりと言う時にそれぞれがバラバラに働くというよりも三位総合的に働くということなのです。

主が御霊を紹介する時、「もう一人の助け主」と言われました。イエスがいなくなる「代わりに」、という意味ではありません。ギリシャ語では「もう一人の」と言う言葉が使われていて、他の「全く別な」という言葉ではありません。つまり、それはイエスご自身が完全に引退して、全く別な人格を次の指導者にバトンタッチするという意味ではなく、「キリストご自身と同様なもう一人の」という意味です。

さて「もう一人の助け主」という言葉の前提は、主イエスが「良い助け主」であられたということです。つまり、自分も助け主であったように、御霊も助け主である、という意味です。主イエスはこの世におられる時、弟子達に対して良い助け主であられました。そんな良い先生が目の前から居なくなってしまうということは、小さな子供が親を失う以上の寂しさと悲しみをもたらすことでしょう。だからこそ、主は「私はあなた方を捨てて孤児とはしない」と語られたのです（１８節）。もう一度言いますが良い関係にあったからこそ、離れることのショックが大きいのです。あまりつながりがないなら離れてもさほど寂しくはありません。

聖霊は、肉体を持った人間的な存在としてのキリストではなく、目に見えない、しかし、いと近くにおられるキリストを示します。このことは、１８節、１９節の言葉でも明らかです。「わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません。わたしは、あなたがたのところに戻って来るのです。いましばらくで世はもうわたしを見なくなります。しかし、あなたがたはわたしを見ます。わたしが生きるので、あなたがたも生きるからです。」ここで孤児とは不安定であり暗きのなかに放置された存在を意味します。ユダヤでは、ある教師の下にある弟子団はその師を父と呼びました。キリストもまた弟子達を子供達と呼びました。ですからキリストが去ったならばかれらは「孤児となる」訳です。しかし、実際からいうと、キリストは死の中から甦り、彼等の所に聖霊を通して帰ってこられま

した。「戻ってくる」とか「あなた方は私を見る」とは、復活によって実現しました。十字架の死の三日後、主は甦られて弟子達にご自身を示されましたが、これは弟子たちに驚くべき励ましと力を与えました。でも、復活の主は、見える形においてはその後の４０日間だけ彼等と共におり、そして昇天されました。かれらは又孤児になったのでしょうか。そうではありません。１０日後のペンテコステにおいて注がれた聖霊において、キリストの臨在がより深く、より確かに、そして永遠的なものになったのです。

最後に御霊がすぐ近くにおられるということが三つの前置詞で示されています。

①　「ともに」（メタ）：

１６節に「ともにおられるため」と言われました。この「ともに」にメタという前置詞が使われています。友達的な感覚を示す言葉です。御霊は交わり手として、友として、「何時までも」おられます。主イエスの地上での存在は３０数年に限定されていましたが、御霊は何時までも居られます。主イエスは一箇所にしかおられなかったのですが、御霊は「いつも」、「どんな所にも」ともにおられます。復活後のイエスが二人の弟子と共にエマオへの道を歩みなさったことは、御霊がいつも共におられるという真理を証明しています。「見よ、私はいつまでもあなたがたと共に（メタ）居る」（マタイ２８：２０）という言葉を取り上げました。正に主は聖霊を通して私たちと共におられるのです。

②　「すぐそばに」（パラ）：

御霊は、私たちと同じ側に立って、弁護をし、慰め、助けて下さいます。先ほど説明しましたように、御霊は「パラクレートス」（傍らに立つために呼ばれたもの）です。

③「内に」（エン）：

御霊は、内側に住んで下さいます。どんなに淋しく、みなしごと感じるような事があるかもしれないが、このお方によってイエスの内住が確保されるのです。２０節に「その日には、わたしが父におり、あなたがたがわたしにおり、わたしがあなたがたにおることが、あなたがたにわかります。」とありますように、父と子とは一体であり、その一体関係の中に私達も入れられます。三位一体の神の人格は、排他的なものではなく包括的、分裂ではなく固有のものです。・・・御子の内住は、御霊の内住において啓示され実現されます。」つまり、御霊を持つということは御子を持つことなのです。」

聖霊、御霊の働きを見てまいりました。私達の中に、孤児としての寂しさと心細さを感じている人はいないでしょうか。御霊は私たちと共にいてくださいます。このお方に心を開く時、心に満ちて下さるのです。